

精神保健福祉援助実習指導のこれからに向けて

—「06年度取り組み」「08年度取り組み」を振り返って—

Practice Introduction of Psychiatric Social Work Practicum Guidance

坂元寛美

Hiromi SAKAMOTO

精神保健福祉士を養成していく上で現場実習および精神保健福祉援助実習指導が果たす役割は大きい、もとより様々な課題を抱えている授業でもある。本学では実習指導において実習に対する不安解消が難しいなどの課題を抱えており、それらを軽減するため「06年度取り組み」および「08年度取り組み」として内容について検討を行ってきた。結果、学年別の学びの時間を確保するとともに現場実習指導者による授業参加、3・4年生合同のグループ学習という組み合わせによる学習形態を取り入れてきたことにより、学生同士の学びあいが深められ、より実習に対する意識が高まることにつながった。ただ、本学独自の体制による課題を考慮しながら、より学生全体の意識を高め、学習意欲を継続させていくためには実習指導だけでは限界があることがみえてきた。今後は実習指導だけでなく関連する他授業も視野に入れながら、実習システム全体の見直しも含めて検討をしていきたい。

キーワード：精神保健福祉援助実習指導 グループ学習 学年別の学び 学習意欲の向上

はじめに

精神保健福祉士を養成していく上で講義や演習による学習に加え、現場実習および精神保健福祉援助実習指導(以下、実習指導)が大切な位置づけにある。学生が精神保健福祉士としての学びを深めるために現場実習は欠かせない。現場実習の目的は、精神保健福祉士に求められる専門知識、対人援助技術、福祉専門職としての態度等を施設や機関の中で学び、よりいっそう深めていくことにある。⁽¹⁾その学びを得るための準備から振り返りまでを含めて学習していくのが実習指導である。

しかし、実習指導は「事前学習など段階を追った履修(学び)が難しい」、「(実習に際して)基本的な知識不足や記録する力が弱い」などといった多くの課題を抱えているため、大学等の養成機関においては様々な工夫を行いながら対処してきている。^(2~4)

本学でも、実習指導の内容、進め方について2006年度(以下、「06年度取り組み」⁽⁵⁾)と2008年度(以下、「08年度取り組み」)に見直しをしながら行ってきた。そこで、本稿は「06年度取り組み」および「08年度取り組み」の経過を振り返ることを通してみえてきた、新たに検討していきたい課題について報告する。⁽⁶⁾

1. 「06年度取り組み」について

1-1. 05年度までの課題

本学は1997(平成9)年より精神保健福祉士養成を行っており、現在は第11期生が3年生となっている。精神保健福祉士養成の流れは、3年のコース選択(定員50名)から始まる。ただし、1・2年に規定の科目(精神

医学・精神保健学・精神保健福祉論・精神科リハビリテーション学・精神保健福祉援助技術総論)を取得した学生のみが選抜試験を受けることができる。コース選抜後の3年から専門科目(精神保健福祉援助演習、精神保健福祉援助技術各論、精神保健福祉援助実習指導)を学ぶカリキュラムとなっている。(資料1参照:05年度までの実習指導内容)

3年から行なっている実習指導について05年度まで行ってきた内容では図1に示したような課題がみられていた。具体的には3年生は「実習に行くまでの不安が解消できない」「実習に対するイメージができない」であった。4年生は「後半実習への動機付けができない学生がいる」「実習を客観的に振り返ることができない」などであった。その要因としては、3年生についてはテキストを活用しながらの学びでは現実味が無いためイメージしにくい様子が見られ、そのため実習に対する漠然とした不安感が強くなっているのではないかと考えた。また4年生については、実習を客観的に振り返ることができていないため後半実習への動機付けへと繋がらなかったのではないかと考えられた。

そこで、学生同士が学びあえる場を確保することがこれらの課題の軽減に繋がるのではないかと考えた。具体的には事前指導および事後指導に3・4年生合同のグループ学習を取り入れ、学年を越えて学生同士が学びあう力を活用することとした。「06年度取り組み」

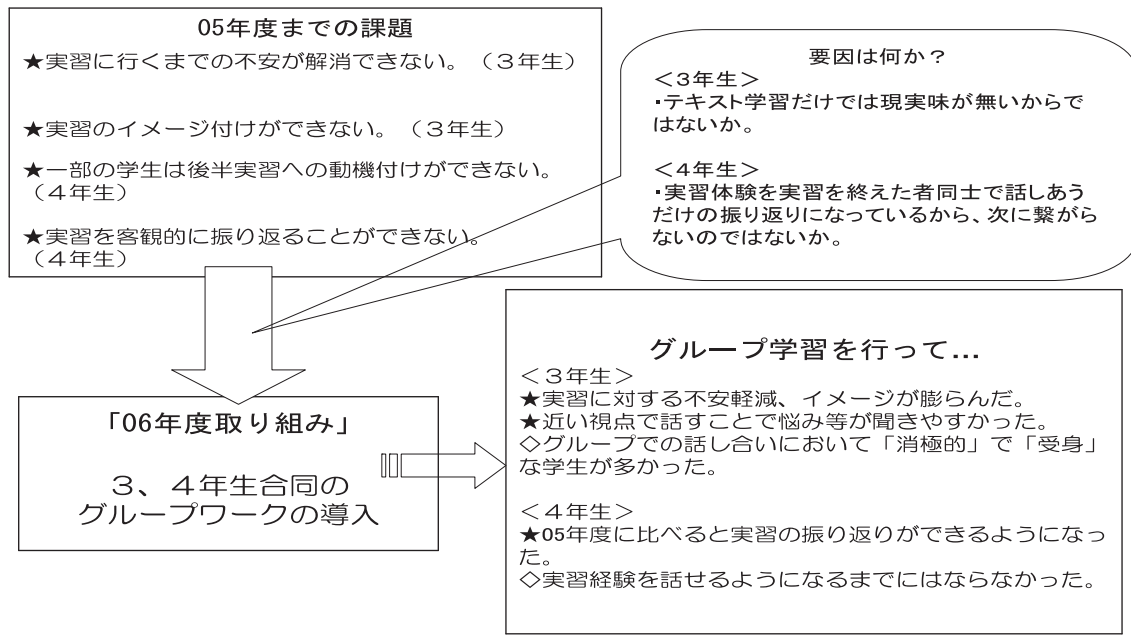


図1 「06年度取り組み」について

1-2. 「06年度取り組み」の成果と課題

図1にもあるとおり「06年度取り組み」(資料2参照:「06年度取り組み」実習指導内容)として3・4年生合同のグループ学習を導入したことにより、3年生は先輩から話を聞くという聞きやすさも手伝って、教員には聞きづらかった、より基本的なことを率直に聞ける機会となった。それにより、実習のイメージが湧くとともに漠然としていた不安の軽減へとつながった。4年生については3年生に自らの実習体験を話すことにより、05年度までに比べ、より実習の振り返りができるようになった。このような成果を踏まえ07年度も「06年度取り組み」を踏襲し実習指導を行った。その結果、さらに工夫が必要ではないかと考えられることがみえてきた。

内容としては、3年生については実習体験を聞くということによる効果は大きかったが、グループ学習において4年生の話をただ聞くだけという「受身」の姿勢となっていた。さらに質問をする内容も漠然としており、グループ内で実習に対する意識を深めていく作業ができない学生が出てきていた。これはいきなりグループで話し合う場を持ったため、グループでの話し合いでわからないこと(専門用語など)を理解することが難しく、実習場面や実習先をきちんと理解することが出来ていなかったからではないかと考えられた。

4年生については、「06年度取り組み」のやり方では、実習で体験したことを経験として語るように結びつけていく⁽⁷⁾ことが難しく、後半実習を深めるための動機付けにつながらない学生もいた。これは4年生が未経験者(3年生)に話をする前に、十分に実習経験を話し合い、整理していく作業ができていなかったからではないかと考えられた。

そもそも、合同グループ学習を導入するにあたって、基礎知識を理解するための事前学習についても“学びあう”ことができるのではないかと考えていた。グループ内で先輩が後輩に「教える」ことにより、基礎的な学びが伴っていくと考えていたが、実際は4年生が3年生に実習で体験したことを経験として語る事が難しく“学びあう”ことにまでは結びつかなかった。“学びあう”ためには、学年別の事前学習が合同グループ学習の前段階として必要であると再認識した。

加えて、4年生が実習体験ではなく実習経験を語るようにしていくためには、まずは同じ体験をした仲間同士の関わりが大切であると考えた。同じ体験をした仲間が話し合うことで、安心して自分の失敗経験やマイナス面を出すことができるとともに、実習中の「気づき」を言語化する機会へと繋がっていく。坂本は『「気づき」を対話することで新たな「気づき」が生まれる⁽⁸⁾』としており、事後学習における少人数での振り返りを重要視している。さらに、「06年度取り組み」において教員は、各グループに参加しながら授業を進めてきた。具体的には、教員が実習巡回での様子や個別の振り返りでの話しを踏まえ4年生が3年生に語るサポートをするとともに、3年生に対しては分からないことなどの理解を深めていくための声かけを中心に行った。教員がグループに入ることを通して4年生が体験したことをより客観的に語り、3年生の理解につながるのではないかと意図していた。しかし村田が『教員と学生という2者関係ではどうしても一方向からの学びになりやすい⁽⁹⁾』と述べているように、学生と教員という2者関係の中での4年生の語りではより内容を深めていくことが難しかった。そこで、実習中の出来事を学生以外に理解している第3者が

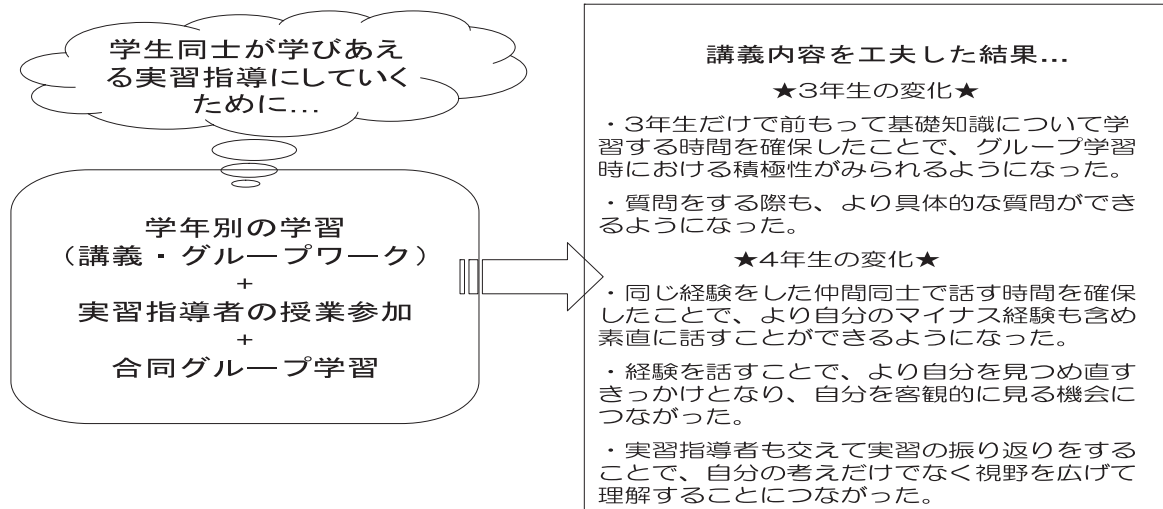


図2 「08年度取り組み」による変化

入ることによって、より客観的な振り返りにつなげていくことができるようになるのではないかと考えるに至った。(「08年度取り組み」)

2. 「08年度取り組み」について

2-1. 「08年度取り組み」の内容

上記のような問題意識を踏まえ「08年度取り組み」として、3・4年生合同のグループ学習を行う前に学年別に学ぶ時間を確保した。加えて、外部講師として4年生の実習指導を担当した実習先の現場実習指導者に授業に参加していただくこととした。(資料3参照:「08年度取り組み」実習指導内容)

具体的には、3年生は学年別の授業において講義だけでなく学生同士で学びあえるようにグループワークを取り入れながら、実習を行うために必要となる事前学習により重点をおきながら進めることとした。加えて、基礎学習の一貫として“社会資源の手引き”の作成・発表を実習指導の授業内で行うこととした⁽¹⁰⁾。4年生については、4年生だけで実習体験を共有化できるよう個別発表に加え小グループで体験を話し合い、自身の体験を振り返られるように工夫した。現場実習指導者には、実習先が実習を受け入れる意義(理由)や実習生に望むことについて講義をしていただくとともに、4年生の実習報告に対するアドバイザーになっていただき、4年生が実習体験を客観的に振り返ることができるきっかけ作りを意識した。

2-2. 「08年度取り組み」結果と考察

学生同士が学びあえる実習指導にしていくために「08年度取り組み」として新たな工夫を導入し09年度も引き続き行った。その結果、図2のような変化が3・4年生それぞれにみられるようになった。

3年生の変化としては、合同グループ学習を中心にしていた「06年度取り組み」の際には、ただ【コミュニケーションについて知りたい】などという質問の仕方であったが、「08年度取り組み」を取り入れてからは【デイケアでの関わり方、コミュニケーションはどうしたらいいのか?】など、より内容に踏み込んだ質問がなされるようになっていた。また【事前学習をしなければいけないと先輩に言われたが、何をしたらいいのか分からない】という意見が以前はみられたが、【実習先、関連する法律についての事前学習が不足していることが分かった】などの感想がみられるようになった。このような変化は、基礎学習の時間に講義だけでなくグループで話し合いながら考える時間を多く取ってきたことにより、グループの中で発言するということに慣れてきたことが影響していると考えられる。加えて、基礎知識が増えたことにより、ただ先輩の体験を聞くという受身な学びではなく、実習場面を想定した実践的な質問ができるようになったのではないかと考えられる。

4年生については、学年別の時間において個人および小グループで実習の振り返りを行う中で、ただ見てきたことを話すだけでなく、自分が感じたこと、迷ったこと、苦しんだことなどを具体的に話しあっていた。その結果、「06年度取り組み」では【利用者や職員とのコミュニケーションの取り方】などに関心が向いていたが、「08年度取り組み」では【失敗をしてもよくよせず、次に活かせるよう切り替える】【何事も思い切って飛び込んでみると勉強できる】など、自分の経験を踏まえてのアドバイスをする学生が多くみられるようになった。それとともに、【実習生としてあるべき姿を知ることが重要】【実習に行くにあたっては自分のことを理解しておくことが大切】などという、自分を客観的に見つめることの大切さを意識するようにもなっていた。

現場実習指導者が授業に参加したことによる刺激も大きかった。4年生の実習の様子も交えながらの講義をしていただいたことにより、より実習指導者を身近な存在として感じながら話しを聞くことができたようである。特に【指導者さんの話しを聞いて、実習生が実習に行く意味が分かった】【きちんと疑問を持って積極的に実習をしていかなければいけないと思った】【(後半実習に向けて)事前学習をしっかりとやらなければいけない】など、改めて実習を行う意義について考える機会になるとともに、後半実習に向けての意識を高めていくことにもつながった。

3・4年生ともに「06年度取り組み」として合同グループ学習を中心に行った試みについては一定の成果を得ることができた。一方で「08年度取り組み」によって、学生のそれぞれの実習時期に合わせた事前学習の時間を確保することの必要性もみえてきた。ただ、学年別であっても講義を中心とした学習を行うのではなく、その中でも仲間同士で“学びあう”時間、グループワークを積極的に取り入れていくことに意味があった。加えて、教員と学生という2者関係だけでなく、現場実習指導者という第3者が特に事後指導の場に入ることは効果的であった。以上のように、講義とグループワークを組み合わせた学年別の学習+現場実習指導者の参加+3・4年生合同のグループ学習という学習スタイルを、学年ごとの学びの段階を配慮しながら行なう(組み合わせ学習)ことが、より効果的であるということが明らかとなった。

3. 今後に向けて

「06年度取り組み」および「08年度取り組み」は、それぞれその時期に生じていた課題を軽減することにつながってきており、それぞれの時期に振り返りながら実習指導内容を検討してきた意義は大きい。しかし、年次ごとに学生は変化し、状況も変化していく。それらの変化に合わせて随時、内容を見直しながら進めていくことが求められている。加えて、今以上に学生全体の実習に対する意識を高め、学習意欲を継続させていくためには実習指導だけでは限界があることもみえてきた。今後は本学独自の体制(3・4年生同時の実習指導、「さみだれ式⁽¹⁾」実習など)に伴う課題も考慮しながら、具体的には表1の項目について検討していきたい。

表1 さらに検討していきたいこと

① 学生のモチベーションを維持していく方法の検討
② 学生への個別対応のあり方
③ 現場実習指導者とのより一層の連携
④ 実習システムについての再検討

1点目としては、学生のモチベーションを維持していくための方法を考えていくことである。「08年度取り組み」で段階的に学ぶことにより実習に対する真摯な姿勢がみられるようになった。しかし、3年生が実習に行くのはこの取り組みから半年が経過した後である。そのため、実習に行くまで続けて「08年度取り組み」で得られた心構え(モチベーション)を意識し続けることが難しい状況もみられる。そこで、今まで行ってきたことに加え、実習先に訪問する“見学”を自分たちで企画するなど、学生が自主的に活動できる方法について検討していきたい。

2点目としては学生への個別対応のあり方についてである。本学の精神保健福祉士コースは3・4年生合わせると例年50名近い学生が受講している。そのため、コース開設当初より個別指導も意識しながら取り組んできているが、人数が多いため学生それぞれが抱えている課題を見落としやすい状況となっていた。「06年度取り組み」および「08年度取り組み」によって、グループで学生同士が助け合いながら取り組んでいける体制が整ってきたことにより、教員も個々の学生を意識し関わりやすい状況となってきた。今後はさらに配慮が必要な学生に対して、グループを意識しながらもどのように個別に関わっていけばいいのか、その方法について考えていきたい。

3点目は現場実習指導者とのより一層の連携があげられる。「08年度取り組み」において現場実習指導者が授業に参加したことにより学生に対してプラスの効果がみられた。他大学においても現場実習指導者と共に実習指導マニュアルを作成するなどの取り組みも行われており⁽²⁾、実習指導内容を検討していく上で指導者との連携は欠かせない。現場実習指導者との関わりも10年を経過し、コース開設当初とは違う方も増えてきている。本学では年1回、実習先施設長および実習指導者会議を開催し、実習指導内容の共有、方向性の確認等を行っているが、今以上に関わりを意識しながら学生の指導について共に考えられる環境を作っていきたい。

4点目はそもそもの実習システムについて再検討していく必要性についてである。本学独自の体制として3・4年生が同じ時間に実習指導を行っていること、年間を通して行っている「さみだれ式」実習などがあげられる。まず、3・4年生が同じ時間に実習指導を行っていることによって、「06年度取り組み」や「08年度取り組み」という合同グループ学習の時間を確保することが可能となった。それにより、学生同士が学びあう機会を作ることができた。反面、50名近い学生を集めて行うため、個々の特性に配慮していくことの難しさも感じられた。他授業との兼ね合いにより実習指導の時間を変更することは難しいため、学年ごとに担当教員制とし、今以上に個々の学生に配慮しながら関わられるよう工夫していきたい。また、本学では「さみだれ式」実習を実施している。かねてより学生が授業期間中に実習に行ってい

るため、事前学習および事後学習を共有することが難しい現状となっている。特に「06、08年度取り組み」での合同グループ学習では4年生が実習で授業を抜けることが多くあり、グループでの話し合いが中途半端になってしまうこともあった。「さみだれ式」で実習を行う期間を考慮し、学生の学びが優先できるよう工夫していきたい。

以上のような点について今後は更なる検討を行いながら、現場で活躍できる精神保健福祉士を養成していきけるよう取り組んでいきたい。

謝 辞

本稿は、精神保健福祉援助実習指導を担当している天野薫教授、山岡由美講師とともに検討を行いながら進めてきた実習指導内容をまとめたものである。本稿を整理するにあたって先生方にご指導ご鞭撻をいただいた。略儀ながら感謝の意としたい。

注)

- (1) 相澤譲治他編『精神保健福祉援助実習』、久美出版(2003年)、4
- (2) 岡田洋一他「鹿児島国際大学における精神保健福祉援助実習の現状と課題(1)―実習生の自己覚知と成長を中心に―」、『鹿児島国際大学福祉社会学部論集』第23巻第4号(2005年)、39-53
- (3) 蔵野ともみ他「精神保健福祉士養成における初期段階の実習教育の現状と課題」、『人間関係学研究』第5号(2004年)、97-107
- (4) 大西良他「実習生の自尊感情とセルフ(自己)イメージとの関係について～精神保健福祉現場実習前後からの検討～」、『久留米大学文学部紀要社会福祉学科編』第7号(2007年)、101-109
- (5) 「06年度取り組み」の詳細については2006年の第5回日本精神保健福祉学会において「精神保健福祉実習指導におけるグループ学習についての一考察」(安藤寛美他)というテーマで報告している。
- (6) 人間福祉学部3年の1年間と4年の前期に行われている精神保健福祉援助実習指導のうち、3・4年生が同時に授業を行っている前期分の取り組みに焦点を当てている。
- (7) 本稿では実習を主観的に語る状況を“体験”とし、実習したことに専門的知識などを結びつけて客観的に語れるようになることを“経験”と整理した。
- (8) 坂本智代枝「精神保健福祉援助実習教育のあり方に関する一考察―学生の初期の「内的なかかわりの過程」の質的分析を通して―」、『大正大学研究紀要』第87号(2002年)、355-366
- (9) 村田久行「第9章 教育プログラム(2):『傾聴と発問』実習」、『ケアの思想と対人援助』、川島書店

(1998年)

- (10) “社会資源の手引き”とは3年生が精神保健福祉士として知っておかなければいけない基礎知識(障害年金、入院形態など)を学生自身が調べてきて冊子にしたものである。これはコース開設当初から精神保健福祉援助演習の授業内で行っていたが、実習で活用するという意識を高めるため、08年度は実習指導の授業内で行うこととした。
- (11) 本学では学生人数や社会福祉実習との兼ね合いにより、実習時期をずらしながら行う実習スタイルを取り入れている。これを「さみだれ式」実習と表現している。

資料1. 05年度までの実習指導内容 (3・4年生合同授業は3回)

3年次生への実習指導			4年次生への実習指導	
	内 容	ポイント	内 容	ポイント
1	オリエンテーション	実習指導の進め方	オリエンテーション 実習報告	実習Ⅱの実習先決定 実習Ⅰの実習報告
2	実習概要	実習の意義・目的・重要性	実習報告(発表)	実習Ⅰの実習報告 (1人ずつ)
3	(講義)	実習にあたっての不安		
4	実習概要(3)	不安の解消		
5	(グループ討議)			
6	実習先の概要	実習先の概要紹介		
7	実習先の理解 (講義)	視聴覚教材による理解	実習報告会に向けて (グループ討議) 実習報告会に向けて (グループ討議)	グループごとにテーマを決める ・テーマ選定理由・実習を通しての疑問・感じたこと、改善点・提案・必要な知識などについて話し合う ・グループとしての結論を示す
8	面接技術 (ロールプレイ)	コミュニケーションにおける援助技術について		
9				
10				
11	実習Ⅰに向けて	4年生の発表を聞く際の心構え 実習Ⅰについての意識確認		
12	実習報告会	4年生がまとめてきたテーマについて報告をする。 3年生が発表を聞き、質問をする。(3年生は4年生の発表を聞くのみ)		
13				
14				
15	振り返り	まとめ(感想) 実習Ⅰに向けて	実習報告の反省 実習計画書作成	まとめ(感想) 実習計画書の作成

資料2. 「06年度取り組み」実習指導内容(3・4年生合同授業は11回)

3年次生への実習指導			4年次生への実習指導	
	内 容	ポイント	内 容	ポイント
1	オリエンテーション	実習指導の進め方	オリエンテーション	実習Ⅱの実習先決定 実習Ⅰの実習報告
2	実習概要(講義)	実習の意義・目的・重要性	実習報告(発表)	実習Ⅰの実習報告 (1人ずつ)
3	実習先の概要	実習先の概要紹介		
4	合同授業	4年生の実習報告と質疑応答 (4年生は1人ずつ実習報告を行う。3年生が質問をする)		
5				
6	合同授業 (グループ討議)	『4年生に聞きたいこと・3年生に伝えたいこと』 ※質問形式でのやりとり(グループ)が中心		
7				
8		テーマ①「コミュニケーション」話し合い・レポート作成		
9		テーマ①「コミュニケーション」グループ発表		
10		テーマ②「実習生としての姿勢(あり方)」話し合い・レポート作成		
11		テーマ②「実習生としての姿勢(あり方)」グループ発表		
12		テーマ③「実習先および利用者について」話し合い・レポート作成		
13		テーマ③「実習先および利用者について」グループ発表		
14		まとめ		
15		合同授業の振り返り	まとめ 実習Ⅰに向けて	合同授業の振り返り

資料3. 「08年度取り組み」実習指導内容(3・4年生合同授業は5回)

	3年次生への実習指導		4年次生への実習指導		
	内容	ポイント	内容	ポイント	
1	オリエンテーション	実習指導の進め方	オリエンテーション	実習指導の進め方 実習Ⅱの実習先決定	
2	実習概要 (グループ討議)	実習の意義・目的・重要性	実習の振り返り (個別指導)	実習Ⅰで学んだ現場と業務について まとめる	
3		実習の目的・実習にあたっての不安	自己の振り返り (講義)	実習に向けての自分への問い直し	
4		グループ討議で出された課題について	実習計画書作成 (個別指導)	実習Ⅱの計画書を作成する	
5	実習先の概要	実習先の概要紹介			
6	実習計画書(案)作成 (個別指導)	実習先を想定して作成する	記録の書き方(講義)	記録の意義・目的理解・事例	
7			グループ発表に向けて (グループ討議)	グループごとの振り返り 発表テーマ設定	
8	社会資源の手引きの 作成・発表	学生作成による社会資源の手引き発表			テーマ整理・まとめ
9					
10					
11	合同授業 (グループ討議)	外部講師の講演			
12		4年生のグループ発表 『実習Ⅰの振り返りと実習Ⅱに向けて』			
13		『3年生が聞きたいこと。4年生が伝えたいこと』についての話し合い			
14					
15		まとめと振り返り			